

# 宋・元版本にみる法華経絵（上）

宮 次 男

## （一）

大乘仏教経典の中で、姚秦釈鳩摩羅什訳の妙法蓮華経、略して法華経は、中国、朝鮮、日本の三国において、多くの人々から特に信仰されたことは周知である。また、この経に依拠した美術工芸品も多種多様に製作され、経意を描いた絵画作品も古くから存在した。

昭和五十六年十月当研究所における国際シンポジウム「文化財の保存及び修復に関する国際研究集会―東アジアにおける美術交流―」に際し、私は「極東の法華経見返絵―特に宋版法華経を中心にして―」と題する口頭発表を行ったが、そこでは時間の制限もあり、十分に意を尽くせなかった。また、その後の知見もあるので、前発表の増補の意味で、宋・元版法華経見返絵の現存遺品<sup>(1)</sup>と、それらの日本及び朝鮮への影響について考えをまとめることにする。

註(1) 本稿では、宋・元の法華経見返絵は版本に限った。肉筆本では岩崎家藏法華経変相や『文物』二八二期（一九七九年第十一期）に紹介された顯徳三年（九五六）奥書の紺紙金字経の見返絵があるが、これらと、版経絵の図相には隔たりがあるので、一応分離して考察した次第である。

## （二）

永延元年（九八七）、入宋僧翕然が宋より請来した京都清凉寺の釈迦如来立像の胎内納入物中に、宋版の法華経変相（靈山淨土図、挿図1）が一枚ある。これは紙本墨摺で、縦七八・〇糎、横四二・一糎の小品であるが、その刻線はきわめて入念に彫成されている。図様は上半部に靈山釈迦說法集會を描き、下半部には二仏並坐する七重宝塔が涌出し、それを分身の諸仏と地中から涌出した諸菩薩が圍繞し礼拝する光景が示されている。これは云うまでもなく、見宝塔品の光景を図したものである。塔下には「弟子某甲一心頂礼妙法蓮華経釈迦多宝如来全身舍利宝塔」と銘文が記入されているが、年紀の記入はない。しかし、清凉寺の釈迦如来立像には他にも、北宋雍熙元年（九八四）の年紀をもつ版本の弥勒菩薩像や、雍熙二年の銘ある版本金剛般若波羅蜜経一帙が納入されており、この法華経変相も、この頃の製作と考えてよいであろう。ともかく、靈山説法と宝塔出現を主要画題にした法華経変相の小品が当時印行されていたのである。

次に、法華経巻の見返絵に見る法華経変相についてのべる。

経巻の見返しに経意を描くことは、中国でも古くから行われている。

年紀をもつ最も古い版本遺品に、唐咸通九年（八六八）の木版金剛般若波羅蜜多経（大英博物館、挿図2）があり、これは古くから広く知られるところである。その巻頭には、花文の塼を敷きつめた露台で釈迦が須菩提に対して説法する光景が図示されている。釈迦は経机を前にして、高い蓮華座の上に施無畏、与願印で坐し、その上方に天蓋がかげられ、一對の飛天が左右に飛行する。釈迦の背後から左右にかけて、九比丘、二菩薩が侍立し、その両側に二力士、王夫妻と侍者三人が控えている。また経机の右前と左横には獅子がうずくまり、その前に長老須菩提が方形の敷物に坐して合掌礼拝している。そして、これらの光景は正面からの描写ではなく、向って斜め左向きの構図で示されている。

この金剛般若波羅蜜多経にみる露台上の釈迦説法図は、構成の菩薩、比丘衆等に変化はあっても、その図様の基本形式は、後世の経巻見返絵に踏襲されており、その先形を唐代に求め得たのである。

挿図1 法華経変相 京都 清凉寺蔵

さて、宋版の法華経で巻頭に絵があるものは数種あるが、それを大別すると、法華経七巻を一冊にした細字本と、七巻七冊の通常のものに分けることができる。

細字本について述べると、見返絵を伴う遺品はわが国に集中している。台北市の国立中央図書館に「妙法蓮華経七巻一冊、宋刊小字梵夾本<sup>(2)</sup>」とある一本は、恐らく、原初には見返絵があったと思われるが、現在では逸脱している。しかし、本文の版形、字形は後述の「四明陳高刀」本と全く同型である（挿図3・4）。そしてこれには、

「紹興己卯二月二十八日比丘 徳永謹願」

の墨書の跋（挿図5）があり、南宋紹興二十九年（一一五九）にはすでに存在していたことがわかる。なお、台北市の国立故宫博物院にはこの種の細字本は蔵されていない。

見返絵を伴う細字本は、二種類の存在が確かめられる。

一は「呂斌刀」の刻工名を画面左下端にもつもので、京都雲竜院蔵一冊、及び、内藤湖南氏の遺愛古書図録である『恭仁山莊善本書影』所載のものである（挿図6）。

この見返絵は、折り本冊子二折半、つまり五頁にわたって細い線で刻画されている。その図相は、第三頁にあたる中央に、天蓋下に坐す釈迦像があり、その前に「舍利弗」と「阿闍世王」（「は銘札」が対坐し、釈迦の左右の画面いづかに、十大弟子、八部衆、「菩薩衆」、四天王、天子たちが配され、「天王」、「阿修羅」、「迦楼羅」、「乾闥婆」、「龍王」、「帝釈」、「梵王」、「日宮天子」、「月宮天子」、「星天子」と銘札に記入されている。釈迦の上方、天蓋の左右には飛来した如来像、向って右側に

にも見られるものである。

長沢規矩也氏の「宋刊本刻工名表初稿」によると、「彦」を表記した<sup>(3)</sup>

挿図3 細字法華経 奈良 伝香寺蔵

挿図2 金剛般若経見返絵

英国 大英博物館蔵

「妙音菩薩」、「地涌菩薩」、左側に普賢騎象像の影向と涌出した宝塔が天空を雲に乗って飛来する。したがって、本図は、説話的主题にとぼしく、釈迦説法図としての表現にとどめられているとみるべきであろう。なお、この本文の版木の端に「彦」、「王」、「周」の刻工名が刻まれている。このうち「彦」は、次にのべる奈良伝香寺他蔵の細字法華経

版本で最も古いのは静嘉堂の紹興中明州刊宋末補修本『文選』ということになる。また、両者の本文の彫成を比較しても近似するものであって、両者は同時代の製作であることは疑いない。

次に、「四明陳高刀」の刻工名を左下端にもつ一本があり、これには同種のものが数本伝えられている(挿図7)。すなわち、安貞二年(一二二八)に造立された奈良伝香寺地藏菩薩立像の胎内納入物。建長五年(一二五三)に宋人伊行末によって造立された奈良般若寺十三重石塔に納められた一冊。そのほかに、香川善通寺蔵本、愛姫保国寺蔵本があり、さ

a 巻頭

台北 国立中央図書館蔵

b 巻末

挿図4 細字法華経

挿図6 細字法華経見返絵

京都 雲竜院蔵

挿図5 細字法華経跋

台北 国立中央図書館蔵

挿図7 細字法華経見返絵

奈良 伝香寺蔵

らに江上綏氏の御教示によると、米国会図書館にも一本蔵されている。そしてこの美国国会図書館本については、ハーバード大学のローゼンフィールド博士が紹介している。<sup>(4)</sup> それによると、この細字法華経はセドウィック・コレクシヨンの一二九二年（正応五）供養の南無仏太子像の胎内に納入されていたものであり、この細字法華経は王重民氏の刻工に関する研究を引用して、一一四六年から一一六四年にかけて、即ち南宋紹興一六年—隆興二年に活動した四明陳高により、杭州か寧波のどちらかで、一一六〇年（紹興三〇）頃に制作されたとしている。前記した台北市の国立中央図書館本と時代が一致するのである。さて、この「四明陳高刀」本細字法華経見返絵は三折半、七頁にわたるもので、図には銘札があって、それにより絵解きされる。

右上端に「靈山妙会」が示され、「釈梵衆」、「龍王衆」「魔王衆」が侍立、その前には「授声聞記」の十僧が座し、「妙莊嚴王」、「授調達記」、「授龍女記」の人々が礼拝する。上方では妙莊嚴王の王子「葉王」、「葉上」が神変を現じ、そこにはまた火宅と三車が「三車出宅」として示され、「不輕菩薩」が石を投げられて受難する。その前には「記微塵衆」として多くの俗形が靈山妙会に向って礼拝している。

次に、七重宝塔が涌出、その周囲を「分身諸仏」が囲繞し、塔下に「三草二木」が示される。塔の左方には上方に、屋内の「五種法師」（経の受持、読、誦、書写、解説）、その前庭で、童子の



「聚沙為塔」、下方に法華經を誹謗した者が鉄の獄舎で罪せられて「謗經獲罪」と記されている。

これらの左には化城喻品に説かれる「大通智勝仏」の仏殿が「諸梵天王」を侍立させて示され、前庭では一僧が多数の僧の前で「王子覆講」をしている。さらに左側に、海から涌出した五重宝塔があり、それに向かって一切衆生意見菩薩が焼臂供養を行い、「藥王然臂」と記されている。その塔の上方には、雲上の普賢菩薩が六牙の象に乗って「普賢東来」し、妙音菩薩がそれに続いて「妙音東来」する。それらのそばでは太鼓を前に「諸天擊鼓」する姿が示される。その下方には、提婆品に説く「從海涌出」の文殊菩薩に、知積菩薩が竜宮の有様を問う姿が「知積文

殊」として示される。その背後には多くの人々がこれらの光景に向って合掌している。また、その上方に山容を隔てて海が示され、海難の舟と、崖からつき落される男など、普門品に説かれる光景が示され、「觀音冥応」と題されている。最後は、上空から「阿弥陀仏」が来迎し、その下には「弥勒内院」があつて、これを礼拝する俗人に多くの如来が手をさしのべる「千仏授手」の光景が示される。

ここにみる図様は法華經二十八品から主題を選定して図示されているわけであるが、その多くは、七卷七冊本にもみられるものであり、またわが国の法華經見返絵にもみられるところである。しかし、法華經二十八品を一画面に収めるに際しては、構図の中心に七重宝塔を置き、右に

挿図 8 a 法華經卷一見返絵

台北 国立故宫博物院藏

挿図 8 b 法華經卷一見返絵

京都 栗棘庵藏

挿図 9 a 法華經卷二見返絵

台北 国立故宫博物院藏

挿図 9 b 法華經卷二見返絵

京都 栗棘庵藏

釈迦の靈山妙会における受記、左に阿弥陀仏の来迎と弥勒の内院を配し、主要な經意を示して安定感ある画面を構成している。そうした内容と表現における配慮は見るべきといえよう。しかし、彫成にあたっては、前記した呂斌刀本に比較して精緻さにやゝ欠けるものであり、それゆえに広

挿図10 a 法華経卷三見返絵 台北 国立故宫博物院蔵

挿図10 b 法華経卷三見返絵 京都 栗棘庵蔵

挿図11 a 法華経卷四見返絵 台北 国立故宫博物院蔵

挿図11 b 法華経卷四見返絵 京都 栗棘庵蔵

(5) Library of Congress  
Quarterly Journal, VI,  
No. 2 (Feb. 1949), pp.  
8-9. この文献について  
は未だ当たっていない。

## (三)

わが国で書写された  
法華経は八巻構成であ  
るが、中国乃至朝鮮の  
法華経は七巻構成であ  
る。

見返絵のある七巻七  
冊本の宋版法華経は意

く流布されたことが推察される。すなわち、普及版としての性格を本巻に見いだすのである。

なお、この本の刻工「陳高」は前記長沢規矩也氏の「宋刊本刻工名表初稿」によると図書寮の『文選』（紹興中明州刊宋末補修本）『白氏六帖事類集』（紹興刊本）にその名を見るので、本経も先に述べたように、紹興の頃の製作であることは疑いない。また、雲竜院本細字法華経も同じ時期の製作ということになる。

註(2) 『国立中央図書館善本書目』子部釈家類

(3) 「書誌学」二卷二号（昭和九年二月）一一二五頁

(4) John M. Rosenfield, The Sedgwick Statue of the Infant Shōtoku Taishi, Archives of Asian Art 22 (1968-69), pp. 56-79.

外に遺品が少く、管見では、わが国の京都栗棘庵に七巻七冊、奈良西大寺興正菩薩坐像胎内納入品に、巻七の一冊、台北市の国立故宫博物院の宋刊大字本七巻七冊と、宋刊本七巻七冊の内第一巻を数えるにすぎない。故宮博物院の宋刊大字本（図版Ⅶ・挿図8 a-14 a）は毓慶宮旧蔵で、七冊とも巻首に二折四頁にわたって図があり、本文の内題の下方に小さく刻工の名が刻されている。次にその名をあげると、巻一は「李璿彫板」巻二は「李璿刀」、巻三は「張由」、巻五は「徐真」で、巻四、六、七には刻工名がない。また巻頭の図には表題があり、「妙法蓮華経卷第一相」以下第七相に至るが、巻第三、第四、第六には最後の「相」を欠く。さらに、この見返絵の中で、第二相の左下端に「秦孟彫」と右から左に横

書きで署名があり、第三相の左下端に縦書きで「辺仁彫」とある。但し、この巻頭の図は巻五の第三、四頁、巻六の第四頁、巻七の全図が後補であり、原初には署名のあったことも考えられる。

『国立故宫博物院宋本図録』<sup>(6)</sup>の解説によると、本文を刻した李璫は、日本静嘉堂蜀大字本『漢書』の補刻刻工に、張由は故宫博物院蔵の紹興間明州刻本『文選』中に、また文祿堂訪書記著録の宋浙刻本『龍龕手鑑』中に、そして徐真は文祿堂訪書記著録の『宋臨安刻本漢官儀』中にそれぞれ見いだすという。そして、これらの書籍は殆んどが南宋初期の浙江刻本であるというから、本経も、その頃浙江で印行されたと考えてよいであろう。

この七巻七冊の本文には次の鑑蔵印が認められる。すなわち「秘殿珠林」朱長、「乾隆御覽之宝」朱円、「嘉慶御覽之宝」朱円、「乾隆鑑賞」白円、「三希堂精鑑璽」朱長、「宜子孫」白方の六印である。

なお、図様については栗棘庵本と構図、主題内容とも一致しているの  
で、後述することにする。

京都栗棘庵蔵の七巻七冊（図版Ⅷ・挿図8b・14b）は巻頭の図を完備した善本で、図の表題も巻一の「妙法蓮華経巻第一相」以下、巻七の第七相に至るまで記されているが、ここでも巻三と巻六は「相」を欠く。

各図の左下端に刻工名が刻されていて、それによると、第一、二巻は「四明陳忠 陳高刀」第三、七巻が「陳忠刀」、第四巻が「四明李栄刀」、

第五、六巻が「陳高刀」  
となっている。

このうち陳忠は前記長沢氏の研究<sup>(7)</sup>によると、図書寮の『尚書正義』（光宗刊本）、及び『文選』と『白氏六帖事類集』（紹興刊本）に名を見るし、また、陳高は、前記した奈良の伝香寺や般若寺の細字法華経の見返絵の刻工と同名であることは甚

挿図12 a 法華経巻五見返絵

台北 国立故宫博物院蔵

挿図12 b 法華経巻五見返絵

京都 栗棘庵蔵

挿図13 a 法華経巻六見返絵

台北 国立故宫博物院蔵

挿図13 b 法華経巻六見返絵

京都 栗棘庵蔵

台北 国立故宫博物院蔵

挿図14a 法華経卷七見返絵

京都 栗棘庵蔵

挿図14b 法華経卷七見返絵

だ興味がひかれる。すなわち、その製作が前記細字本と同じ紹興年間の末頃（一一六〇年頃）と推定できるのである。

この栗棘庵本と前記故宮の宋刊大字本はいずれも同じ図様で、巻頭二折、四頁に収まり、周囲を宝相華文を配して縁取りした枠で区画されている。その中に、露台上で説法する釈尊とそれをかこむ聖衆が左斜め向きに示され、露台の前方や向う側に各巻の経意が描かれる。そして、枠内右上端に「妙法蓮華経卷第一相」以下第七相までが題記されているのである。

次に各巻における経意絵について述べる。

第一相（序品・方便品）、序品は画面上方に示される。釈迦の白毫から左

に向って煙状に二条の光が放たれ、上の光中に遠方から、如来の双樹下説法と仏涅槃を拜む二比丘、下の光中には同じく遠方から牛頭の獄卒が監視する鉄釜地獄、阿修羅に追われて逃げる狐（犬か）二匹と半裸瘦身の人間（餓鬼か）、双樹下坐禅する修行者（菩薩）と、それを拜む男が示される。いずれも序品に説く他土六瑞の相である。その下にはにえたぎる釜がある城郭の中で三人の半裸の男が合掌して走っており、それを囲むように左上端の双樹下に坐す菩薩の眉間から光が放たれる。これも「又菩薩の林に処して光を放ち、地獄の苦を済い、仏道に入らしむるを見る」と経にあるところである。

方便品はその下方に示される。画面の下端、露台の階段の前に仏画を描く男、三人の童子が三重塔を礼拝するところ、その上に、蓮台に坐す如来像を造る三人、さらに仏殿中の三尊仏に対し奏楽供養する三人、その上に如来坐像を拜む男が示される。これらはいずれも成仏道者を示すものである。

第二相（譬喩品・信解品）露台では四大声聞に対して説法が行われる。

露台の外には大樹三本が立っており、画面上方に大邸宅が示され、邸内の家屋の軒先から火焰が吹き上り、庭には異形の者三人が走りまわり、蛇やサソリがいる中を二人の童子が門に向って歩いている。云うまでもなく、譬喩品に説く火宅の光景である。門外には長者が、羊・鹿・牛の三車をしたがえて立っており、鹿車に御者が侍立している。

信解品は、この火宅の下方に示される。すなわち、長者窮子の譬喩の、窮子が父から派遣された二人の使者に執えられ、心配のあまり悶絶する所、小屋に逃げ帰った窮子を再度迎えに行く憔悴した二人の使者、父長

東京 反町家蔵

挿図15 法華経卷三見返絵

者に財宝を与えられる窮子の三場面が示される。窮子の小屋の外には蛇がおり、狐を追いかける二童子の姿が添えられているが、これは法華経を誹謗した者が蛇になり、狐に生まれ変わって童子にむち打たれるという譬喩品の説相である。

東京 反町家蔵

挿図16 法華経卷五見返絵

第三相（薬草喩品・授記品・化城喩品）画面左上部に豪壮な城郭があり、その城壁沿いに竜が雲に乗って降下する。その下に樹木にかこまれた家があって、簑、笠をつけた二人がそこに向かっている。薬草喩品に説く、慈雨

と三草二木の譬喩を示すものである。また露台の向う側に、比丘菩薩を従えた如来の前に坐す四俗形が示され、これは授記品に説く迦葉、須菩提、迦旃延、目蓮の授記を示すものであろう。また、露台の入口の前で大王から食事を施されている三人の男がおり、これも同品に説く授記の喜びの譬喩である。

さて、画面上方の城郭は、いうまでもなく化城喩品の図で、城壁に沿って二匹の虎が歩いており、二人の男が一人の男に城に案内されようとしている。導師と旅人である。城の上方には三宮殿が雲上に示され、如来が雲に乗って飛来する。これは大通智勝仏と、諸々の梵天王がこの如来を讃嘆して献上した宮殿である。また、高床の説教台から説法する僧が城下にみられるが、これも大通智勝仏の第十六王子が僧となってこの世で経を説くという化城喩品の所説である。

第四相（五百弟子品——勸持品）画面左上端に、家で寝台に寝る者を傍で見まもる男が示されている。これは五百弟子授記品に説く衣裏繫珠の譬喩である。次の人記品所依の図は特になく、法師品は露台入口で高床の説教台で経を読む僧で示す。

露台の向う側に二仏が並坐する六角形の宝塔があり、これに向って三如来が雲に乗って飛来する光景が展開する。宝塔品の所説を示すものである。また、三如来の後方に、梵火のそばを枯草を背負って通る人と、その危険を知らせようとする人が示されている。仏滅度後の惡世にこの経を受持することの困難さを譬える同品の担負乾草の譬喩である。

提婆品は、画面上方の海中から湧出した文殊菩薩と、左下端で仏に宝珠を献上して、昇天する竜女の姿で図示する。そして、露台の入口の高

台北 国立故宫博物院藏

挿図17 法華経卷一見返絵

奈良 西大寺藏

挿図18 法華経卷七見返絵

第五相（安樂行品——分別功德品）、画面左上方に王がいる大邸宅が武人に警固されて示されている。安樂行品に説く転輪聖王の物語を示すものである。また、雲上の多数の菩薩は、從地涌出品に説く涌出菩薩の飛来を示すものであり、大王の邸前で机を出して薬を調合するのは、寿命品の良医妙薬の譬喩を示すものである。さらに、分別功德品で説く、精舎建立と説経僧礼賛の光景が、画面下部にそれぞれ示されている。

第六相（随喜功德品——薬王品）、露台上の説法場面では、釈迦に對座する聴聞の菩薩がとりわけ目立っている。これは囑累品の経意と考えられる。釈迦の眉間からは光が放たれ、その中に多くの神殿が示されている。神力品の所説を描いたものである。

露台の外側では王が財宝を人々に与えているところの前で、二つの高床の説教台で説法する僧形と俗形が示されている。これは財宝を布施する功德と、人々が順次に法華経を説いて広め、第五十番目に至ってこれを説く人の功德を對比して示そうとするもので、展転説法の功德がはるかに多いことを示そうとする随喜功德品の所説を表すものである。次の法師功德品の図様は持経の功德により天に昇る二人の姿が表わされ、不輕品は常不輕菩薩が棒を持った男たちに追われる受難で示される。

薬王品は、画面下方に、一切衆生意見菩薩が如来の前で焼身供養するところと、四基の宝塔の前の焼臂舍利供養が描かれ、さらに上方に、女性の極樂往生を示す。すなわち、蓮台上に化生する女性を拝む三人の女性があり、その傍に竜が描かれていて、これが竜女成仏と何らかの関連があることを示唆している。

第七相、釈迦の眉間から光が放たれ、その中に宮殿、山々などが示さ

床で経を読む僧は法師品所依の五種法師を示すものであり、そのそばで花模様の履いのある机を前にして、唐草と花文が施された円形の台上で女性に対して経を読む女性は勸持品で説く耶輸陀羅の姿であろう。

れる。これは妙音品に説く東方諸仏の世界である。この光にそって妙音菩薩が東方の世界から飛来し、多宝仏塔を礼拝する光景が描かれる。

次の普門品は画面左端の山水の周囲に示され、天空の雷雲の下で逃げまどう男、山頂から落されても虚空に浮かぶ男、家の中で食中毒の難にあう男、虎や蛇の難の男、賊に逢う男、杻械枷鎖から解放される男、火坑に落ちても、火坑が水の池に変化して助かる男などが描かれて、観音力が示されている。また陀羅尼品の図は特にないが露台の天部（持国・多聞）がこれを代行するとみることができる。

敵王品は露台入口の前に仏に帰依した二王子が父母の前で神変を演じる場面が描かれ、また、その上方に勧発品所説の普賢菩薩が一侍者をつれて象に乗って影向する光景が示されている。

以上が典型的な宋版七巻本の法華経見返絵の画題と図相であるが、この図相は金泥の肉筆で描かれたものがある。それは長寛元年（一一六三）の年紀をもつ僧心西の供養願文を巻頭紙背にもつ紺紙金字一字宝塔法華経の見返絵（挿図15・16）で、現在、巻三と巻五が反町家に蔵されている。これは八巻本であるがこの見返に宋版の見返絵と全く同図が描かれている。しかし、宋版にみる右半分の露台上の釈迦説法図は切除されており、折本の左二頁分が巻頭についている。また、巻五は七巻本巻四の図となっている。これは同図に八巻本巻五巻初の提婆品の図相があるためである。わずか二巻分だけしか遺っていないので、全体の状況は計り知れないが、本経の製作にあたって見返絵を他から転用したことも推察される。恐らく、当時、このような法華経図相が日本にも請求されていたのであろう。しかし、多くの遺品がある十二世紀中葉以降の金字法華

経の見返絵に、この宋版系の図相がみられないのは、当時、すでに日本に定着した図相があったからであろう。

次に台北市の故宮博物院の宋刊本七巻七冊（挿図17）は、巻第一の巻頭にしか絵は残っていない。しかし、その図様は上記栗棘庵本や宋刊大字本と異なる。

絵は巻頭の三折、六頁にあり、中央の第四頁には釈迦説法集会、右の第一、二頁に仏伝中、釈迦の在俗の事蹟が示される。すなわち、誕生した釈迦が七歩して天上天下をゆび指すのを「仏母」と天部が見ており、その上方で「九竜吐水」して灌頂するのを二天部が仰ぎ見る。第三頁には「伽那城坐 於菩提樹」として、獸衣をつけて岩窟内で坐禅修行する太子、その頭髮には鳥が巢を作っている。また、その下方には机上に香炉があり、一婦人が合掌する。そして、岩窟のそばに「太子出於釈宮」として三侍者をともなった太子が出馬する光景が示されている。

集会の左は第五、六頁にわたり、法華経の説相が図示される。左端上半に大邸宅の廻廊の一部が示され、その前に「兵戦有功 賜与象馬」として象牙や宝珠などの財宝と馬が示されている。これは安樂行品に説く転輪聖王の譬中明珠の譬喩である。また、廻廊にそって上方に「好色香薬 与子令服」として、机上に薬品をおき二人の子に施薬する長者が示される。云うまでもなく、これは寿量品に説く良医妙薬の譬喩である。その前には「年始二十五 示人百歳子」として、高床の説教台から三人の俗形に対し説法する僧が示される。これは従地涌出品所説の老少対談を示すといえよう。また、これら説相図の下方に仏涅槃図がある。涅槃の方便について説く寿量品の所説を示すものである。

以上、この図相は、仏伝図は別として、いずれも七卷本巻第五に説かれる主題である。恐らく、原初にあっては、巻五の巻頭を飾っていたと考えられる。若しこの推測が正しければ、他の六巻の図も、それぞれ説話図とし興味ある図相であったと推定されるのである。

奈良西大寺の興正菩薩坐像胎内納入の宋版法華経は巻七の一冊（挿図18）で、巻頭三折、六頁にわたって見返絵がある。その中央、第三頁にやゝ左向きに釈迦が台座に坐し、それを囲繞する比丘菩薩、諸天、諸菩薩が示され、釈迦の前に比丘が礼拝し、図の左右端にそれぞれ脇侍菩薩が描かれる。これには説話的内容はなく、恐らく、全巻同図様であったと考えてよいであろう。

以上、宋版の法華経見返しにみる図相を現存作品について検討を加えたが、法華経説話を多く描いたものとして、細字本の四明陳高刀本と、七卷七冊の故宮博物院宋刊大字本及び栗棘庵本の図相が広く行われていることが分かった。しかも、この両者はともに南宋の紹興年間の末に流布しており、七卷七冊本には肉筆の金泥絵も存在して、当時における典型的な法華経絵の図相であったことが確かめられた。

次に、宋版法華経見返絵の法量を表記しておく。いずれも版型の匡高と横巾で、単位は厘。

雲竜院 細字本	匡高18.4×巾41.3
陳高刻 細字本	16.25×59.8
故宮博物院宋刊本	19.4×52.8
故宮博物院	
宋刊大字本	
卷1	24.0×50.5
2	24.5×49.3
3	24.5×49.5
4	24.4×49.9
5	23.9×49.9
6	24.4×49.0
7	23.9×49.9
栗棘庵本	
卷1	23.6×49.0
2	23.8×48.5
3	23.5×49.4
4	22.4×49.0
5	23.1×49.6
6	23.2×49.2
7	22.8×49.2

註(6) 国立故宮博物院編 中華民國六十六年六月

(7) 註5参照

## 図版要項

一	観音経絵 向かって左幅(原色刷)	石川 本土 寺 蔵
	掛幅装 絹本着色 各幅 縦二四・六 cm 横九〇・一 cm	
二	同 向かって右幅	同
三	同 同 右上部分	同
四	同 同 右下部分	同
五	同 同 左幅 右上部分	同
	一―五 宮島新一「本土寺所蔵 観音経絵について」参照	
六	赤人像(業兼本三十六歌仙切)	東京 畠山 記念館 蔵
	掛幅装 紙本着色 縦二七・三 cm 横二二・〇 cm	
	六 真保 亨「業兼本三十六歌仙絵」参照	
七	妙法蓮華経巻第一相	台北 故宮博物院 蔵
	折本冊子装 紙本墨刷 縦二四・〇 cm 横五〇・五 cm	
八	妙法蓮華経巻第七相	京都 栗棘庵 蔵
	折本冊子装 紙本墨刷 縦二二・八 cm 横四九・二 cm	
	七・八 宮次男「宋元版本にみる法華経絵上」参照	
九	狩野芳崖筆 岩石図	東京 芸術大学 蔵
	掛幅装 絹本墨画 縦一三六・二 cm 横八五・〇 cm	
	九 佐藤道信「狩野芳崖筆 岩石図」参照	